

I	F	C	C	国	際	友	好	文	化	セ	ン	タ	ー	活	動	報	告					
(	1	)	日	中	青	年	寧	夏	固	原	市	生	態	緑	化	モ	デ	ル	林			
・	開	工	式	典	へ	の	参	加	報	告												
																			木	幡	英	雄
	私	は	、	今	回	の	参	加	に	あ	っ	て	、	林	業	関	係	者	と			
	し	て	、	中	国	内	陸	部	の	大	変	乾	燥	し	た	土	地	に	ど	の		
	よ	う	に	植	林	が	行	わ	れ	て	い	る	の	か	、	ま	た	、	事	前		
	資	料	で	見	せ	ら	れ	た	寧	夏	紅	寺	堡	で	の	2002	年	の	砂			
	漠	か	ら	2014	年	の	立	派	な	ポ	プ	ラ	林	が	形	成	さ	れ	て			
	い	る	姿	を	こ	の	目	で	確	か	め	た	い	と	い	う	思	い	で	今		
	回	参	加	し	た	。																
		5	月	22	日	(	金	)		羽	田	空	港	を	発	ち	北	京	空	港		
	経	由	で	銀	川	市	へ	。	翌	日	、	こ	れ	ま	で	の	植	林	事	業		
	地	「	中	寧	県	生	態	緑	化	モ	デ	ル	林	」	を	視	察	し	、	今		
	回	の	事	業	地	・	固	原	市	に	向	か	っ	た	。	寧	夏	回	族	自		
	治	区	の	省	都	・	銀	川	市	か	ら	車	で	5	時	間	の	地	に	あ		
	る	。																				
		高	速	道	路	を	ひ	た	す	ら	南	下	し	て	い	く	コ	ー	ス	で	、	
	途	中	、	1	3	年	前	に	植	林	活	動	を	開	始	し	た	紅	寺	堡		

の近くを通過した。かつて、紅寺堡での事業  
では、高速道路はおろか道の整備も行き届い  
てはおらず、ボコボコ道を半日かけて移動し  
たそう、紅寺堡ICでできるほどの変わりよ  
うを想像もできなかつたそうだ。  
式典会場では、固原市楊副市長と地元大  
学生らが出迎え、式典及び記念植樹を行っ  
た。  
佐藤団長は式典の挨拶で、「平和問題と環  
境問題には、国境、人種、宗教等すべてを超  
えて取り組む必要がある。ことに環境問題に  
ついては、この植林プロジェクトを通じて、  
13年間で、5市中4市の8か所に、訪問団と  
して総勢200名以上、植林面積として2,000ha以上  
を行うことができた。そして、この活動は、  
単に砂漠を緑化することによって生態系を改善する  
だけでなく、地域の生活改善へつなげていく  
ことが重要であると感じた。中国の広い大陸  
からすれば小さな点にすぎないが、やがて線  
になり、そして森になると信じている。さら

に、活動を通じて寧夏自治区の方との友人関係  
を大きく広くできている。このように植林  
活動を通じた友好の絆を大きく広く、そして  
未来に向けて育てていきたい」と話された。  
この挨拶を聞き、数本ではあったが植林を  
行った後、改めて周辺の自然をじっくり観て  
みると、そこには多くのトンボが飛び交い、  
野花が可憐に咲き、その花粉を求めて虫たちが  
が盛んに飛び交い、遠くでは鳥のさえずりを  
耳にすることのできた。ここには生態系が形  
づくられてきていることを五感で感じるこ  
とのできた。生態建設という私には乱暴に聞こ  
えた言葉だったが、何もしなければ荒涼とし、  
砂漠に飲み込まれてしまいうこの厳しい土地に  
おいて、このように世代を越え、民族を越え、  
国を越え、共に手を取り合い行った植林活動  
という行為がその言葉の意味なのだと感じた。  
そして、ここに来るまでに目にした緑の大半  
は、人の手によるものであったことを思い起  
こせば、点が線に、線が面にとしつかり結果



としての取り組みを伺った。

最初に県長趙宏さんから、歓迎のあいさつがあり、続けて、格日楽図内モンゴル自治区中国国際青年連合会秘書長から現状の話をお聞きした。

実際の現場については、張連根林業局長から「植林が始まってから、生態系に変化がおこってきている」「松を植林している。2～3年はあまり成長しないが、4年過ぎると、成長する姿がよくわかります」と報告される。

午後からは、植林を行っている現場に移動。そこには、20名程度の若い人の姿があり、劉支局長に尋ねると「彼等・彼女等は、休みを利用してここで活動を手伝っている」と分かった。実際、何人かに聴いてみた。若者の多くは、呼和浩特（フフホト）市（内蒙古自治区にある首都）にある、内蒙古大学の学生であった。学生が、多倫県に帰ってきたことがわかったので、呼びかけて、一緒に手伝ってくれているそう。それにしても、女子の

多いことに、びっくり。このように、若い世代が植林活動に自主的に参加していることに、その意識の高さや主体的な動きに、改めて感服。その学生とともに、苗木を植えるために、等間隔に穴を掘り、苗木を運び下し、土で埋め、水をバケツ一杯かける作業を行った。砂漠地区ではなく、草原地区ではあったが、元々砂漠だったところを草原化し、そこに植えたのであった。この一つ一つ小さな作業が積み重なり、活着すること、砂漠化が食い止められるのであった。日程の最終日、北京市内にある中国国際青年交流センターにて、王希宏部長、羊強振科長と面談。王部長は「当センターは全国30か所でこのような取り組みがある。特に多倫県は、最も北京に近い。ここで砂漠化を止めなければ、北京も砂漠化の影響がでる」と、強調。ぜひ、来年も多くの日本人に声をかけ、一

